

恩師でありつづける Mike Menaker

山崎 晋[✉]

Department of Neuroscience, Peter O'Donnell Jr. Brain Institute, UT Southwestern Medical Center

サイエンスを通して真実を探索し、また近年ポリテイクスを語るときには真実を認めることの大切さを説いた恩師が、この世を去って行ったという事実をいまだに認めることができないでいる。それは、今このコンピューターの中にある3Dイメージを恩師に見せることができなかったからなのかもしれない。もしそれが叶ったなら、何時間でもこれを見ながら語り合うことができたであろうと思う。私が独立し彼のラボを去る数か月前に、一度だけ口論になったことがあった。その後すぐに恩師は私のオフィスにやってきて、さっきまで彼が主張していたことをあっさりと変え、お前にはできると信じていると言った。今になってもそれが実現していないことが、恩師の死を認めることができない理由なのかもしれない。しかしもし実現し、恩師に知らせることができたなら、そのことを恩師と一緒に喜んでくれたに決まっている。

Mike Menaker は時間生物学の巨人の一人であり、優れたサイエンティストであるのに Professor 気取りがなく、みんなの Dear Friend であった。私には常に Teacher であったし、またこれからもそうあり続けるであろう。英語はもちろんのこと、家を買うときの良い家の選び方まで彼の経験から教えてくれた。彼から学んだ不条理なことへの折り合いのつけ方などは、かつて私が恩師に聞いたことと全く同じことを私の学生が私に聞いてくるので、そのまま私の学生へ伝えている。恩師は、サイエンスでなにか新しい発見があると、それがたとえ自分のラボからの発見でなくても子供のように喜んだ。メラノプシンが哺乳類の網膜に発現していることが示されたとき、ノックアウトマウスが光に同調するか賭けようということになった。2人とも桿体と錐体細胞があるならメラノプシン受容体がなくても光に同調するだろう、ということで賭けは成立しなかったが、論文が出るたびに2人で盛り上がった。いつしか私も独立し自分なりの研究ラインを確

立したが、ファンシーなテクニックに少し飽き、恩師のラボでかつて体験したようなわくわくするような研究、なにか新しいことを見つける研究を始めたくなり、新しいプロジェクトを始めた。偶然なのか必然なのか、始めた地点は違うのに、真実を探求して行くうちにそれは恩師の晩年の研究とつながっていった。2012年のSRBRのシンポジウムでそのことを話したとき、恩師は一番前の席に陣取り、私の話を何度も嬉しそうに相槌を打ちながら聞いていた。一応ジョークで会場のウケを取った時は、自分は学会会場で話しているのだという現実を認識できたが、それ以外の20分ちょっとの時間は、まるでかつての彼のラボミーティングで話しているような不思議な感じで、発表者である私と一番前の席に座っている恩師の2人だけに光があたっているような光景であった。

2019年のクリスマスに、メールで恩師にプロジェクトのアップデートを書いたが、“I can't wait to hear about your new results with MASCO!” とすぐに返事がきた。2020年のクリスマスに送ったメールで、結果が出たので3Dイメージをぜひ見せたいと書いたが、返事は来なかった。数週間後に Joe Takahashi から恩師の健康のことを聞いた。バージニア大学の人からは、恩師は亡くなる半年ちょっと前まで本や論文を読んで、新しい授業で教える準備をしていることを嬉しそうに話していたと聞いた。恩師は最後まで Teacher であったのだろう。最近、彼の晩年の学生であった人と話をする機会があった。彼のオフィスに行って話をしてオフィスを出るときは、いつもインスパイアされポジティブな気持ちで心がいっぱいになったそうである。恩師は、私がいつまでたっても成長しないから、私には Teacher であり続けたのかもしれない。しかし一つだけ確かなのは、Mike Menaker は今後も私の Teacher であり続けるということである。